

介護福祉学生に対する心理劇導入の効果 その(2)

—観客役割を通じたモデリングによる学習効果—

西日本短期大学 一山 幸子 (006399)

キーワード：専門的対人援助技術、心理劇、プロセスレコード

1. 研究目的

筆者は、福祉職を目指す学生に対して高齢者や障害児者との実際の関わり場面を具体的にイメージすることができるように、集団心理療法の一つである心理劇におけるロールプレイを演習に取り入れている。本研究では学生たちが役割演技を体験することを通じて、具体的な介護場面のイメージが広がり福祉職に求められる専門的対人援助技術としての利用者理解、自己覚知、そして利用者支援の方法の気づきを促すことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

高原(2006)は、心理劇によるワークショップを取り入れ、特別支援教育に携わる教員に対して教育訓練を行った。そこでは、「教員各自が自分自身を見つめ、自分を振り返る」「特別支援教育やその他の教育現場に関わっている子どもたちに対する理解を深める」という2点を目的に心理劇を行った。その結果、前者の目的に対して研修参加教員88人中70人(約80%)は肯定的な感想であった。また後者の目的に対して心理劇が有効であると答えた参加者は63人(72%)であった。

発達障害児のグループセラピーにおいて、そのカンファレンスに心理劇を導入した研究も報告されている。渡邊(2006)は、軽度発達障害児に対するグループセラピーのカンファレンスにおいて心理劇を導入し、セラピストが援助者役と子ども役の双方の役割を体験することやミラー技法によって自分自身を客観的に見ること、支援技法を見出だせることを報告している。松山(2011)は、ソーシャルワーク演習において心理劇を活用する意義を、また時田(2015)は介護職をサポートする研修の実践を報告している。

一山(2008)は、介護福祉学生が①利用者理解を深める、②学生自身の自己覚知・自己洞察を進める、③利用者支援の方法について気付く、という3点を目標として心理劇を導入した結果、心理劇は教育訓練の一つとして有効であると報告した。そこで本研究では、これら3点の観客の役割を通じて得られるモデリングによる学習効果について報告する。

対象者は、X大学社会福祉学科1年次学生28名。2014年12月にX大学内教室にて実施した。11月の介護実習を通して自分の体験の中で振り返りたい場面を1場面選び、プロセスレコード(介護場面の再構成)を作成した。学生が作成したプロセスレコードの中から事例A:認知症高齢者に対する食事介助場面、事例B:ダウン症の利用者に対する作業支援場面の2つの場面を取り上げて心理劇を行なった。その後、振り返りシート(①利用

者の気持ち、②自分の気持ち、③支援方法の再考)を学生全員が記入するが、本研究では心理劇場面で観客役となった学生の振り返りシートの内容を分析する。

3. 倫理的配慮

対象者及び関係者に対して本研究の目的を説明し研究の同意・協力を得た。また、学会発表として公表するに当たり、対象者個人が特定できないように匿名化した。

4. 研究結果

観客の立場での学生の振り返りシートの結果について述べる。

1) 利用者理解(利用者の気持ち):「何度も“食べて下さい”と言われると嫌だと思う」「初めて合う人なので不安感があっただろう」「スプンが何のためにあるのか理解できなかったのだろう」「なぜ隣で自分を見ているのか」「“眠たい”と言っているが他にしたいことがあり食事を拒否した」「あなたも飲みなさい、と人に配慮する優しい人」「知らない人に文句を言われたら嫌になってやる気を失くす」等。

2) 学生自身の自己覚知・自己洞察(自分の気持ち):「もっと食べてほしい」「対応方法が分からない」「見本通りに正しく作業してほしい」「利用者が無視した、と捉えているが、そうではなく聞こえていない、気付いていないのかもしれない、と捉えた方が良い」「正しい作業ができて当然だという仕事に対する厳しさがある」等。

3) 利用者支援の方法(支援方法の再考):「普段の食事の仕方を把握するべき」「顔色や声の調子を確認する」「一度スプンを使って見せる、介助して食べてもらう」「メニューを伝える」「美味しいですよと声をかける」「優しい口調で話しかける」「作業を褒めてから間違っている所を伝える」「正面から名前を呼びかける」「褒めたのは良かった」等。

5. 考察

事例AとBの体験を劇化することを協力してくれた学生YとZ自身もプロセスレコードを作成する際に、先述の研究結果にある学生たちの意見と同様の利用者理解、自己覚知、支援方法の再考ができていた。実際の関わり場面を客観的に振り返り、さらに再現することによって利用者の状態や気持ちを利用者の立場に寄り添って理解し、自身の性格行動傾向を自覚し、より望ましい支援方法が導き出せる。福祉職を志す学生にとって不可欠な対人援助技術習得の一助となる。「実習中に上手くいかなかったことを劇でその場面を再現し、その時の様子を鮮明に思い出すことで、その時には分からなかった利用者の思い等を少しずつ理解することができた」「自分のことを客観的に見ることができ、悪い部分などに気づき反省することができた」という感想も聞かれた。観客役割は同様の実習体験を経た学生たちにとってはミラー技法にもなりモデリングの効果がうかがえた。今後、プロセスレコードの作成と心理劇によるロールプレイとの効果の差異を検証することが課題である。